

//REPORT//

令和4年度ユネスコスクールオンライン意見交換会

3/23 開催

第5回「GIGA スクール時代の ESD一端末を活用した学校間交流の方法」



ユネスコスクール事務局では、令和2(2020)年度より、ユネスコスクールオンライン意見交換会を1～2か月に1回のペースで実施しています。今年度第5回目は「GIGA スクール時代の ESD一端末を活用した学校間交流の方法」と題して、15名の参加者と対話の場をもちました。

■プログラム

開催日時:2023年3月23日(木) 16:30～17:30

時間	内容
16:30	オープニング 趣旨説明 ACCU教育協力部 部長 大安 喜一
16:35	事例紹介 法政大学 キャリアデザイン学部 キャリアデザイン学科 教授 坂本 旬 氏 地球対話ラボ 中川 真規子 氏
16:55	グループディスカッション 事例紹介を聞き感じたこと、各校の取り組みをお互いに共有します。
17:15	振り返り グループ毎に、ディスカッションで話したことを発表します。 (良かった点、学んだこと、今後活かしたいこと、改善点、メリット・デメリット等)
17:30	クロージング

■ 事例紹介

法政大学 坂本 旬 氏、地球対話ラボ 中川 真規子 氏 をお迎えし、ご発表いただきました。

以下、法政大学 坂本氏のご発表の概要です。

本日は「GIGA スクール時代の ESD—端末を活用した学校間交流の方法」というテーマにて、「国際交流」を中心にお話したいと思います。本題に入る前に、法政大学坂本旬ゼミは ACCU と共同で「ESD 推進のための動画集」を制作しています(第1弾のご視聴は[こちら](#))。ぜひご活用ください。

さて、私は 2009 年よりビデオレターによる国際交流実践に取り組んでいます。そして現在はオンライン映像交流サイト(OATube)を使った国際交流・学校間交流を行っています。

はじめに「国際交流を行うときに気をつけること」をお伝えします。一点目として、国際交流を「ESD のカリキュラムに位置付ける」ことが重要です。具体的に何をテーマとするのか考え、そして探究学習のプロセスのなかに位置付ける必要があります。最終的にそれが行動と振り返りに結びつかなければなりません。一連のカリキュラムの中に国際交流をどのように位置付けるかを最初に決めておかなければ、何をしていたのかが分からなくなってしまいます。具体的な学習のテーマとしては地元の産業等が挙げられます。実際に交流をした結果、他のテーマに結びつくこともあります。例えば、ネパールとの交流を通して、ネパールの小学校には楽器や衣服がないということに気がつき、子どもたちが交流の後にネパールに楽器や衣服を送ることに決めたという学校の事例もあります。二点目として、「交流をイベントにしない」ことが重要です。イベントになってしまうと、子どもたちの主体性が十分に発揮されません。三点目として、「身につけるスキルを明確にする」ことが必要です。特に、映像をつくって交換する際にはメッセージの読み解きと制作のスキルというメディアリテラシーの視点が入ってきます。単なる映像制作のスキルではなく、交流してどのようなメッセージを受け取るのか・送るのかという点が意識されなければいけません。四点目は「外国語教育と接続する」です。国際交流を通して身につけるスキルの一つとして英語が含まれることが考えられます。調査により、国際交流が英語学習の動機付けを高めることが分かっています。小学校でこのような経験をすることが、中学校・高校での語学学習の動機付けにつながると言えるでしょう。五点目としては、国際交流の目的は「お互いの違いを知ること」だと言われますが、実際にはお互いの理解が深まるのは、「むしろ同じだということに気がつくこと」が大切であるという点です。最後に、今後は GIGA 端末を活用し、「国際協働学習」を進めていくことが期待されます。

具体的な事例を紹介します。私が行った須賀川市立白方小学校(福島県)とネパールの小学校の交流につきましてはウェブサイト公開されております(活動報告は[こちら](#)、ビデオのご視聴は[こちら](#))。白方小学校の実践は「(双方向)非同期型異文化交流」に分類されます。リアルタイムでやりとりするのではなくビデオによる交流が行われました。ビデオによる交流では、どのようなメッセージを伝えるのかについて考え、絵コンテをつくり、それを映像にしていという一連のプロセスが必要となります。また送られてきた映像を読み解く必要もあります。具体的にディスカッションをしながら映像を読み解くという授業が必要となります。つまり映像制作と読み解きは一連のプロセスのなかで学習していきます。当然スキルが必要となります。映像制作のスキルだけでなく、メディアリテラシーの能力が必要と

なるのです。もう一つの方法が「同期型異文化交流」です。つまり、リアルタイムでの交流です。日本の学校とトルコの学校の交流の例を紹介します。日本の学校はひとつの教室に集まっていますが、トルコの学校はそれぞれの家庭から接続して参加していました。

なぜ交流をするのかについて、日本の学校とアメリカの学校の交流を例に紹介します。子どもたちに交流を行う前に、アメリカに対するイメージを挙げてもらい、イメージマップをつくってもらいました。そのイメージマップからは子どもたちのアメリカに対する知識が乏しいことが分かりました。テレビや映画からしかアメリカのイメージを受けていないため、食べ物やゲームのイメージが中心となっています。リアルなアメリカの子どもたちの実態は知らない、知る機会がないわけです。その後、アメリカからは英語のビデオレターが送られてきました。英語で送られてきたため、すぐに理解することは不可能であり、読み解きが必要となります。英語教育と接合した授業として、英語の先生と ALT の先生により英語の読み解きをしていきます。読み解き後は、返事をつくっていきます。どのようなメッセージを相手に伝えたいかを考えていきます。子どもたちは映像の読み解きから様々なことに気がつきます。子どもたちの様々な疑問を大事にし、それを返事にして活かします。子どもたちが気づくことには、大人が気づかない点も含まれています。教える側が気をつけるべき点としては、子どもたちにあらかじめ情報を与えすぎないということです。例えば、ネパールの場合、相手の家庭環境が貧困であっても、そのことを大人はあえて言いません。子どもがそれに気がつくプロセスが大切であると考えます。

続いていわき市立四倉小学校(福島県)の事例を紹介します。四倉小学校はインドネシアの学校との交流を行いました。この例では、「非同期型」の交流(ビデオの交換)のあとに、「同期型」の交流(Zoom によるリアルタイム交流)が行われました。お互いに映像をつくって見ているため、「同期型」の交流の趣旨がはっきり分かるという点がポイントであると考えます。

交流が一回で終わることがないように、動画交流サイト(OATube)をつくり、活用しています。小学校であれば小学校レベル、中学校であれば中学校レベルで動画交流ができるようにしています。セキュリティ上安心な環境でやりとりができるようにしています。

GIGA スクール時代では、デジタル・シティズンシップが大切であると言えます。デジタル・シティズンシップ教育を ESD と接合することにより可能性が広がると考えられます。一人一台端末となり、どのように端末を活用するのかを学ぶ必要があります。安全性・リスクの問題もあります。そのような問題にどのように対処するか日常的に取り組む必要があります。よってデジタル・シティズンシップ教育が必要なのです。デジタル・シティズンシップはユネスコのものであります。ESD の土台としてデジタル・シティズンシップがあるべきだと考えられます。

坂本氏にご発表いただいた後に、いわき市立四倉小学校における国際交流に坂本氏と携われた地球対話ラボ 中川氏にご発表いただきました。以下、中川氏のご発表の概要です。

映像による国際交流として、坂本先生より先ほどお話のあった四倉小学校とインドネシアの学校の交流の事例を発表します。地球対話ラボでは東日本大震災以降、東北と 2004 年にスマトラ沖震災と津波で被災したインドネシア・アチェの間での国際協働プロジェクトを実施しています。具体的には、四倉小学校で活動するときは「総合的な学習の時間」を使って交流を行っています。参加しているの

は小学6年生です。1学期から2学期の途中にかけて、6年生は地域のことにに関して学習をしています。自分の地域を知ることを目的に学習をし、学習した内容をインドネシアの学校に伝えます。地域学習の部分は、学校で先生と子どもたちで進めていきます。その後の映像制作のパートは、地球対話ラボや坂本先生、法政大学の学生の協力を得て進めていきます。事前学習として事前ワークショップを子どもたちと行ってから活動をはじめています。このワークショップでは、アチェとつながり、アチェに関する質問を通してアチェについて学んでいきます。次のパートでアチェの子どもたちにどのようなことを伝えるかを考え、映像制作を行っていきます。四倉小学校で活動をする際、映像の撮影は子どもたちが端末を利用して行いますが、大学生にも手伝ってもらい、子どもたちが表現したいけれども表現できないところや、「このようにしたら伝えたいことを相手に届けられる」といった点を大学生に伝えてもらっています。大学生と活動することにより、子どもたちが普段見せない表情を見せてくれると、学校の先生たちにも評判となっています。映像を双方で見た後、映像をもとに質問をし合う「同期型」の交流につなげていきます。映像を見てさらに聞きたいことを子どもたちが質問することが多いです。決まった話をするだけではありません。例えば映像に関すること以外で、「アチェでは何が流行っているのか？」という四倉小学校からの質問がありました。この質問に対し、アチェの子どもたちがアメリカンクラッカーを紹介するなど、ライブ感のある交流が行われています。

■ 振り返り

事例紹介を受け、参加者同士の対話の場が持たれました。以下、話し合われた主な内容です。

- 実際に国際的な交流をしていく中で地域や国によってできる／できないということがある。坂本先生より「非同期型」の交流の良さを教えていただいたように、「非同期型」の交流を行うことでそのような壁を越えられるのではないかと。
- グループディスカッション内で、学校の職員が一丸となって取り組んでいくために、地域のユネスコ協会との連携が大切であるということを教えていただいた。地域と連携を取りながら包括的に進めていくことが大切であると教えていただいたので、実践していきたい。
- 「非同期型」「同期型」両方の交流についてお話いただいたが、どちらも教科横断型の学びが可能であると感じた。外国語学習だけでなく、例えば外国語で話す前に、何を話すか考えることは国語の勉強になる。学びがつながることを感じた。
- 国際交流を行っている団体と協働して実施することが大切である。
- イベントにしないためにも子どもたちの内側からでてくる気持ちを共有できることが大切であると思う。
- どのように生徒の目を世界に向けていくかということを考えるときに、教科書には載っていない、実践の場で感じられる感性のようなものを刺激していく必要性を感じた。
- 「違いでなく同じことに気がつく」というお話があったが、非常に重要な点であると感じた。お互いの共通点を探っていくことで、交流がさらに深まっていくと感じる。



[オンライン意見交換会の様子]

※次回の詳細につきましては、決定次第、[ユネスコスクール公式ウェブサイト](#)内「最新情報」、[ユネスコスクール公式 Facebook](#) 等でお知らせいたします。ぜひご参加ください！